

沖縄では

日本で唯一地上戦に巻き込まれた沖縄の人たちは、米軍の攻撃に痛めつけられただけでなく、守ってくれるはずの日本軍からも一部でひどい目にあわされていた。

壕の中で敵の搜索から逃れるために、息をひそめていたとき、子どもが突然かん高い声で泣いた。4，5歳の男の子だった。兵隊は、「敵が外にいるぞ。殺してしまえ。」



写真で語る 沖縄の戦い
森山康平 著
河出書房 発行

渡嘉敷島では、守備軍の隊長の命令で、住民300人以上が集団自決させられている。

壕の中で、終戦も知らず、生米をかじりながら42日間も岩床に座って孤独感に耐えていた女性もいた。

犠牲になるのは若い人たち

「ひめゆりたちの祈り」の著者香川京子氏は、作品の中で語る。

戦争でいちばん大きな犠牲を強いられるのは、いつも若い人たちです。時の権力者や指導者は、自分たちは安全な場所から、若い人たちに「やれ、やれ」と号令をかけて、死地に追いやっている面があるわけです。

若い人たちが戦争でどんなに多くの犠牲を払うかは、沖縄戦の結果をみれば、はっきりしています。



自分の体験と映画撮影を通して知った戦争の怖さを綴った作品
香川 京子 著
朝日新聞社 発行

沖縄戦での戦没者数	
【日本側】	
・ 軍人、軍属	9万4千人
・ 戦闘に参加した住民	5万5千人
・ 一般住民	3万9千人
計	約19万人
(沖縄県 生活福祉部援護課の調べ)	
【米軍側】	
・ 軍人	1万2千5百人
【沖縄1歳から1歳】	3,911人
・ 男子生徒	2千人余りのうち
・ 女子生徒	約1千人
・ 戦死	
・ 女子生徒	約590人のうち
・ 戦死	330人以上
【「ひめゆりたちの祈り」より】	

子どもたちの友情の人形

豊橋に2体 今も残る「青い目の人形」

昭和2年、アメリカから、約1万2千体もの日米親善「青い目の人形」が贈られた。それは、各都道府県に配布され、町村の小学校・幼稚園に分配された。当時は、「アメリカの人たちが、友情や愛を込めて贈ってくれた人形」だということで、大喜びで人形を迎え、大切に保管された。

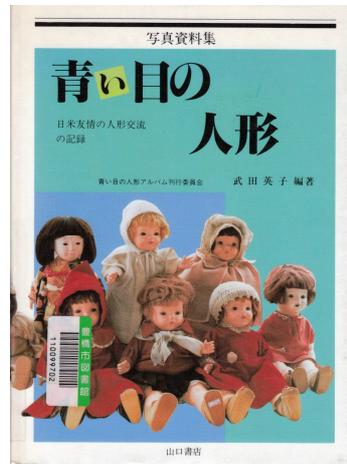
しかし、今では、200体あまりしか残っていない。戦時中、「つくき敵国の人形」ということで、焼却されたり、壊されたりしたからである。当時、ある学校で児童にアンケートをとったところ、

①破壊	89名
②焼いてしまえ	133名
③送り返せ	44名
④目のつく所へ置きいじめる	31名
⑤海へ捨てる	33名
⑥白旗を肩にかけて飾る	5名
⑦米国のスパイと思って注意	1名

という結果になったという。このことから、児童の心にも、戦時下日本の観念が、浸透していることがよく分かる。



右：エセル・ディーン（細谷小学校所蔵）
左：コネタ（西郷小学校所蔵）



青い目の人形
武田英子
山口書店 編
発行



あやと青い目の人形
松永照正 著
クリエイト
タイプ2 発行

一方で、人形を必死で守ろうとした人たちもいた。

豊橋には、今でも西郷小学校と細谷小学校に残っていて、大切に保管されている。子どもたちは、愛を込めて贈ってくれたアメリカの人々の心と、壊さずにそっと隠してくれた、戦争中の学校職員の思いを、しっかり引き継いでいる。

『青い目の人形、ただいま87歳』